

電子情報通信学会論文誌 p_LA_TE_X 2_ε クラスファイル (ieicej.cls version 1.3) の使い方

電子 花子^{†a)} 情報 太郎^{††} 通信 次郎^{††}

How to Use p_LA_TE_X 2_ε Class File (ieicej.cls version 1.3) for the Transactions of the
Institute of Electronics, Information and Communication Engineers

Hanako DENSHI^{†a)}, Taro JOHO^{††}, and Jiro TSUSHIN^{††}

あらまし 電子情報通信学会論文誌の p_LA_TE_X 2_ε クラスファイル, ieicej.cls (version 1.3) の使い方を
説明します. 本クラスファイルに基づく記述の仕方, クラスファイル使用上の注意点, ならびにタイピングの際
の注意事項です. 本クラスファイルは, アスキー版 p_LA_TE_X 2_ε に基づいて作成しています.

キーワード アスキー版 p_LA_TE_X 2_ε, タイピングの注意事項

1. まえがき

電子情報通信学会論文誌の投稿原稿 (論文, レター
など), 依頼原稿 (招待論文, 解説論文) ならびに技
術研究報告を, ieicej.cls を利用して執筆する際に
必要なことを解説します. 2. で本クラスファイル固有
の使い方を, 3. で美しい組版を行うためのヒントな
らびに長い数式を処理する際のヒントを, 4. で最終
原稿提出方法に関わることを, 「付録」で PDF 化する
場合の注意ならびに jis.tfm の利用に関わることを
説明します.

論文執筆上の注意事項は, 各ソサイエティの「和
文論文誌投稿のしおり」(<http://www.ieice.org/jpn/ronbun.html>) を参照してください. ここでは, 本ク
ラスファイルの使用にかかわる点のみを説明します.

本誌は本文の活字の大きさを, 写植の単位の 12 級
(3 × 3 mm の大きさの文字, 9 pt 相当) に設定してい
ます. したがって, \normalsize, \small などのサ
イズおよび行間を表 1 に示すように変更しています.

表 1 サイズと行間の変更
Table 1 Settings of size and baselineskip.

\normalsize	9 pt, \baselineskip=4.75mm
\Small	8 pt, \baselineskip=4.5mm
\small	7 pt, \baselineskip=3.25mm
\footnotesize	6 pt, \baselineskip=3.25mm
\scriptsize	\footnotesize と同じ
\tiny	5 pt, \baselineskip=2.25mm
\large	10 pt, \baselineskip=4.75mm
\Large	11 pt, \baselineskip=6.75mm
\LARGE	12 pt, \baselineskip=8.25mm
\huge	14 pt, \baselineskip=25pt
\Huge	17 pt, \baselineskip=30pt

本クラスファイルを利用した組版は, 刷り上がりの
目安と考えてください. 著者から提出された最終原
稿に基づき, あらためて印刷会社が組版を行います.
T_EX のバージョンの違いなどによって, 著者の提出し
た原稿と印刷会社で組版した原稿のレイアウトなどが
変わる可能性があります.

レイアウトに関係するパラメータの変更などは行わ
ないでください. また, 文字や段落の位置調節を行う
ための \vspace, \smallskip, \medskip, \hspace
などのコマンドの使用は必要最少限にとどめ, list
環境のパラメータを変更することも避けてください.

2. クラスファイルの説明

ieicej.cls クラスファイルは, オプションを指定

[†] 第一大学工学部, 東京都
Faculty of Engineering, First University, Yamada 1-2-3,
Minato-ku, Tokyo, 105-0123 Japan

^{††} 大阪株式会社開発部, 吹田市
R&D Division, Osaka Corporation, Kawada 4-5-6, Suita-
shi, 565-0456 Japan

a) E-mail: denshi@ieice.org

表 2 タイプとオプション
Table 2 Options of documentclass.

タイプ	オプション	参照セクション
論文	paper	2.1.1
サーベイ論文	survey	
招待論文	invited	
解説論文	comment	
レター	letter	2.1.2
研究速報	letter	
紙上討論	letter	
問題提起	letter	
ショートノート	letter	
訂正	letter	
C 分冊レター	letterpaper	2.1.3
技術研究報告	technicalreport	2.1.4

することにより原稿の体裁（タイプ）にすることができます。体裁（タイプ）に従って、それに応じたオプションをドキュメントクラスに指定して下さい。タイプとオプションの対応は、表 2 の通りです。オプションに何も指定しない場合は、paper が指定されたものとみなします。

2.1 テンプレートと記述方法

まず、「論文」タイプから説明します。「レター」タイプ、「C 分冊レター」タイプおよび「技術研究報告」のタイプは、「論文」タイプと異なる部分のみ説明します（2.1.2, 2.1.3, 2.1.4 参照）。

原稿執筆に際しては、本クラスファイルとともに配布されるテンプレート（template.tex）を利用できます。

2.1.1 「論文」タイプ

```
\documentclass[paper]{ieicej}
%\documentclass[survey]{ieicej}
%\documentclass[invited]{ieicej}
%\documentclass[comment]{ieicej}
\usepackage{graphicx}
\field{A}
\jtitle[柱用題名]{論文題名}
\etitle{Title in English}
\authorlist{%
  \authorentry{電子 花子}{Hanako DENSHI}
  {Tokyo}
  \authorentry{情報 太郎}{Taro JOHO}
  {Osaka}
}
\affiliate[Tokyo]{第一大学工学部, 東京都}
{Faculty of Engineering, First University,
```

```
Yamada 1--2--3, Minato-ku, Tokyo,
105--0123 Japan}
\affiliate[Osaka]{大阪株式会社開発部, 吹田市}
{R\&D Division, Osaka Corporation,
Kawada 4--5--6, Suita-shi,
565--0456 Japan}
\begin{document}
\begin{abstract}
和文あらまし
\end{abstract}
\begin{keyword}
和文キーワード
\end{keyword}
\begin{eabstract}
英文アブストラクト
\end{eabstract}
\begin{ekeyword}
英文キーワード
\end{ekeyword}
\maketitle

\section{まえがき}
---- (略) ----
\ack % 謝辞
---- (略) ----
\begin{thebibliography}{9}
\bibitem{}
\end{thebibliography}

\appendix
\section{}

\begin{biography}
\profile{m}{電子 花子}{%
1996 東北一大学情報工学科卒 .
1999 東京第一大学工学部工学部助手 .
某システムの研究に従事 . }
\profile*{m}{情報 太郎}{%
1995 大阪一大学工学科卒 .
1997 同大大学院工学研究科修士課程了 .
1998 大阪 (株) 入社 .
某コンピュータ応用の研究に従事 .
ABC 学会会員 . }
\end{biography}
```

```
\end{document}
```

記述方法を順に説明します。

- `\field` は、各サイエティごとの分冊の指定です。分冊と `\field` に指定するアルファベットの対照は以下のとおりです。

分冊	指定するアルファベット
A 分冊	A
B 分冊	B
C 分冊	C
D-I 分冊	DI
D-II 分冊	DII

- `\jtitle` には和文題名を指定します。任意の場所で改行したいときは、`\\` で改行できます。

`\jtitle` の引き数は、柱 (3 頁目の一番上に出力される“論文 / 電子情報.....”という部分) にも出力されます。題名が長すぎて柱の文字がはみ出す場合 (ワーニングが出力されます) などは、

```
\jtitle[柱用に短くした題名]{題名}
```

という形で、柱用に短い題名を指定してください。

- `\etitle` は、欧文題名を指定します。引き数は柱に出力されないため、`\etitle[柱用題名]{題名}` という使い方はしません。

- 著者名を出力するには、以下のように記述してください。著者名、所属などの出力体裁を自動的に整えます。

著者のリストを `\authorentry` に記述し、リスト全体を `\authorlist` の引き数にします。

```
\authorlist{%
\authorentry{和文著者名}{英文著者名}
{所属ラベル}
\authorentry{和文著者名}{英文著者名}
{所属ラベル}[現在の所属ラベル]
}
```

という形です。例えば、以下のように記述します。

```
\authorlist{%
\authorentry{電子_花子}{Hanako_DENSHI}
{Tokyo}
\authorentry{情報_太郎}{Taro_JOHO}
{Osaka}
\authorentry{通信_次郎}{Jiro_TSUSHIN}
{Nagoya}[ATT]
```

```
}
```

- 第 1 引き数は和文著者名を指定します。姓と名の間には必ず半角のスペースを挿入してください (スペースを挿入し忘れた場合には、ワーニングが出力されます)。

- 第 2 引き数は英文著者名を指定します。ファミリーネームは大文字で記述します。

- 第 3 引き数は著者の所属ラベルを指定します。このラベルは、後述する `\affiliate` の第 1 引き数に対応します。ラベルは大学名、企業名、地名などを表す簡潔なものにしてください。所属がない場合は、`none` と指定します。複数の所属がある場合には、カンマ “,” でラベルを区切って記述します。ラベルの前後やカンマの後ろに余分なスペースを入れないでください。`{Tokyo}` と `{Tokyo_}` は所属が違うものと判断します。

- 現在の所属を記述する場合は、ブラケットにラベルを指定します。ラベルの前後に余分なスペースは入れないでください。このラベルは、後述する `\paffiliate` の第 1 引き数に対応します。

- 必要に応じて、メールアドレスも指定することができます。これは脚注部分に出力されます。

```
\authorlist{%
\authorentry[メールアドレス]{和文著者名}
{英文著者名}{所属ラベル}
}
```

- 和文著者名および英文著者名を任意の場所で改行する必要が生じた場合は、それぞれ `\alignorder`、`\breakauthorline` コマンドで制御することができます。

```
\alignorder=3
```

と記述すれば、和文著者名のリストを 1 行に 3 名ずつ並べます。

また、

```
\breakauthorline{3}
```

と記述すれば、英文著者名の 3 人目の後ろで改行します。カンマで区切って複数の数字を指定することもできます。

- 所属は `\affiliate` に指定します。

```
\affiliate[所属ラベル]{和文所属}{英文所属}
```

第 1 引き数のブラケットに `\authorentry` で指定したラベルを記述します。第 2 引き数に和文の所属を、第 3 引き数に英文所属を指定します。この場合も、ラベルの前後に余分なスペースを挿入しないでください。

\authorentry で記述したラベルの出現順に記述してください。

- 現在の所属は \paffiliate に指定します。

\paffiliate [現在の所属ラベル]{和文所属}

第 1 引き数に \authorentry のブラケットに指定した現在の所属ラベルを記述します。第 2 引き数に和文の所属を指定します。英文所属は指定する必要がありません。この場合も、ラベルの前後に余分なスペースを挿入しないでください。

- affiliate および paffiliate のラベルが、\authorentry で指定したラベルと対応しないときは、ワーニングメッセージが端末に出力されます。

- 著者の所属を表すマークが著者名の右肩に出力され、それに対応した所属先が脚注部分に出力されます。

- あらましは、abstract 環境に 500 字以内で、和文キーワードは、keyword 環境に 4~5 語で、それぞれ記述します。

- 英文アブストラクトは、eabstract 環境に 100 ワード以内、英文キーワード（和文キーワードの英訳）は、ekeyword 環境にそれぞれ記述します。英文アブストラクトおよび英文キーワードは、最終ページに一段組で出力されます。

- \maketitle は、以上述べたコマンドの後に記述してください。このあとに本文が続くことになります。

- 「謝辞」を記述する際は、\ack というコマンドを使ってください。ゴシック体の“謝辞”という文字が出力されます。謝辞文との間に空行をはさまないでください。

- 「付録」を記述する場合は、必ず \appendix コマンドを記述してください。

\appendix は、 $\LaTeX 2_{\epsilon}$ 標準のスタイルでは、見出しのカウンターをリセットして、セクション番号をアルファベットにしますが、本クラスファイルでは、“付録”という文字を出力し、セクション番号はアラビア数字のままです。数式番号は“(A.1)”のようになり、図表のキャプションは“図 A.1”、“Fig. A.1”となります。

- 著者紹介は、顔写真の掲載の有無に応じて、それぞれ

```
\begin{biography}
```

```
% 顔写真あり
```

```
\profile{会員種別}{名前}{著者紹介文}
```

```
% 顔写真なし
```

```
\profile*{会員種別}{名前}{著者紹介文}
```

```
\end{biography}
```

のように記述します^(注1)。

- 第 1 引き数に正員、非会員などの会員種別を、第 2 引き数に名前を（姓と名の間に半角スペースをはさみます）、第 3 引き数に略歴を、それぞれ記述します。

- 第 1 引き数に指定できる文字は、m, s, a, h, n, f のうちのいずれか 1 つです。これらのうちのどれかを指定すると、下の表の右欄に示した会員種別が名前の右側に出力されます。

m	正員	(正員)
s	学生員	(学生員)
a	准員	(准員)
h	名誉員	(名誉員)
n	非会員	出力されず
f	正員：フェロー	(正員：フェロー)

- 著者の顔写真を取り込む場合は、横：縦 = 20 : 26.4 の eps (Encapsulated POSTSCRIPT) ファイルを用意し、著者の順番に、ファイル名を a1.eps, a2.eps, ... とし、カレントディレクトリに置きます。これらのファイルがカレントディレクトリにあれば、コンパイル時に自動的に読み込みます。

eps の取り込みは、クラスファイル中で以下のコマンド

```
\resizebox{20mm}{26.4mm}
```

```
{\includegraphics{a1.eps}}
```

で行っていますから、eps ファイルに記録されている BoundingBox の値が実際の画像よりも大きい場合などには BoundingBox を修正する必要があります。

カレントディレクトリに a1.eps などのファイルが用意されていない場合は、四角のフレームになります。

2.1.2 「レター」タイプ

```
\documentclass[letter]{ieicej}
```

```
\usepackage{graphicx}
```

```
\field{A}
```

```
%\typeoffletter{研究速報}
```

```
%\typeoffletter{紙上討論}
```

```
%\typeoffletter{問題提起}
```

```
%\typeoffletter{ショートノート}
```

```
%\typeoffletter{訂正}
```

```
\jtitle{論文題名}
```

(注1): 「レター」タイプは不要です。

```
\etitle{Title in English}
\authorlist{%
  \authorentry{電子 花子}{Hanako DENSHI}
    {m}{Tokyo}
  \authorentry{情報 太郎}{Taro JOHO}
    {m}{Osaka}
}
\affiliate[Tokyo]{第一大学工学部, 東京都}
  {Faculty of Engineering, First University,
  Yamada 1--2--3, Minato-ku, Tokyo,
  105--0123 Japan}
\affiliate[Osaka]{大阪株式会社開発部, 吹田市}
  {R&D Division, Osaka Corporation,
  Kawada 4--5--6, Suita-shi,
  565--0456 Japan}
```

```
\begin{document}
\maketitle
\begin{abstract}
和文あらまし
\end{abstract}
\begin{keyword}
和文キーワード
\end{keyword}
\begin{eabstract}
英文アブストラクト
\end{eabstract}
\begin{ekeyword}
英文キーワード
\end{ekeyword}
\section{まえがき}
---- (略) ----
```

「論文」タイプと異なる部分がありますから注意してください。

- 「レター」の分類は、`\typeofletter` に指定します。「研究速報」、「紙上討論」、「問題提起」、「訂正」、「ショートノート」(C 分冊)です。このコマンドを使用しない場合は、「研究速報」となります。

- 著者名を出力するには、以下のように記述してください。会員種別を指定する引き数が増えます。

```
\authorlist{%
  \authorentry{和文著者名}{英文著者名}
    {会員種別}{所属ラベル}
```

```
\authorentry{和文著者名}{英文著者名}
  {会員種別}{所属ラベル}[現在の所属ラベル]
}
例えば、次のように記述します。
\authorlist{%
  \authorentry{電子「花子」}{Hanako「DENSHI」}
    {m}{Tokyo}
  \authorentry{通信「次郎」}{Jiro「TSUSHIN」}
    {n}{Nagoya}[ATT]
}
```

- 第 1 引き数は和文著者名を指定します。姓と名の間には必ず半角のスペースを挿入してください(スペースを挿入し忘れた場合には、ワーニングが出力されます)。

- 第 2 引き数は英文著者名を指定します。ファミリーネームは大文字で記述します。

- 第 3 引き数は著者の会員種別を指定します。引き数に指定できる文字は以下に示す小文字のアルファベットです(左欄)。

m	正員	(正員)	<i>Member</i>
s	学生員	(学生員)	<i>Student Member</i>
a	准員	(准員)	<i>Affiliate Member</i>
h	名誉員	(名誉員)	<i>Fellow, Honorary Member</i>
n	非会員	出力されず	<i>Nonmember</i>
f	正員:フェロー	(正員:フェロー)	<i>Fellow</i>

- 第 4 引き数は著者の所属ラベルを指定します(`\affiliate` コマンドの第 1 引き数に対応します)。ラベルは大学名、企業名、地名などを表す簡潔なものにしてください。所属がない場合は、`none` と指定します。複数の所属がある場合には、カンマ “,” でラベルを区切って記述します。ラベルの前後やカンマの後ろに余分なスペースを入れないでください。

- 現在の所属を記述する場合は、ブラケットにラベルを指定します(`\paffiliate` の第 1 引き数に対応します)。ラベルの前後に余分なスペースは入れないでください。

- 必要に応じて、メールアドレスも指定できます。

```
\authorlist{%
  \authorentry[メールアドレス]{和文著者名}
    {英文著者名}{会員種別}{所属ラベル}
}
```

- `\maketitle` は、`abstract` 環境と `keyword` 環境の前に記述します。

- あらましは、`abstract` 環境に 120 字以内で、

和文キーワードは、keyword 環境に 4~5 語で、それぞれ記述します。

• 英文アブストラクトは、eabstract 環境に 50 ワード以内で、英文キーワード（和文キーワードの英訳）は、ekeyword 環境にそれぞれ記述します。英文アブストラクトおよび英文キーワードは、最終ページに一段組で出力されます。

2.1.3 「C 分冊レター」タイプ

```
\documentclass[letterpaper]{ieicej}
\usepackage{graphicx}
\field{A}
\jtitle[柱用題名]{論文題名}
\etitle{Title in English}
\authorlist{%
  \authorentry{電子 花子}{Hanako DENSHI}
    {m}{Tokyo}
  \authorentry{情報 太郎}{Taro JOHO}
    {m}{Osaka}
}
\affiliate[Tokyo]{第一大学工学部，東京都}
  {Faculty of Engineering, First University,
  Yamada 1--2--3, Minato-ku, Tokyo,
  105--0123 Japan}
\affiliate[Osaka]{大阪株式会社開発部，吹田市}
  {R&D Division, Osaka Corporation,
  Kawada 4--5--6, Suita-shi,
  565--0456 Japan}
\begin{document}
\begin{abstract}
和文あらまし
\end{abstract}
\begin{keyword}
和文キーワード
\end{keyword}
\begin{eabstract}
英文アブストラクト
\end{eabstract}
\begin{ekeyword}
英文キーワード
\end{ekeyword}
\maketitle
---- (略) ----
```

「C 分冊レター」タイプは、「論文」タイプと基本的

に同じです。

2.1.4 「技術研究報告」タイプ

```
\documentclass[technicalreport]{ieicej}
\jtitle{和文題名}
\jsubtitle{和文副題名}
\etitle{英文題名}
\esubtitle{英文副題名}
\authorlist{%
  \authorentry[densi@firstuniv.ac.jp]
    {電子 花子}{Hanako DENSHI}{Tokyo}
  \authorentry[joho@ohsakacorp.co.jp]
    {情報 太郎}{Jiro JOHO}{Osaka}
}
\affiliate[Tokyo]{第一大学工学部\\
  〒105--0123 東京都港区山田 1--2--3}
  {Faculty of Engineering,
  First University\\
  Yamada 1--2--3, Minato-ku, Tokyo,
  105--0123 Japan}
\affiliate[Osaka]{大阪株式会社開発部\\
  〒565--0456 大阪府吹田市河田 4--5--6}
  {R&D Division, Osaka Corporation\\
  Kawada 4--5--6, Suita-shi,
  565--0456 Japan}
\begin{document}
\begin{jabstract}
和文あらまし
\end{jabstract}
\begin{jkeyword}
和文キーワード
\end{jkeyword}
\begin{eabstract}
英文アブストラクト
\end{eabstract}
\begin{ekeyword}
英文キーワード
\end{ekeyword}
---- (略) ----
\maketitle
```

• \jtitle には和文題名を指定します。任意の場所で改行したいときは、\\ で改行できます。

• \etitle は、欧文題名を指定してください。

• 和文副題名および英文副題名を指定することができます。それぞれ、\jsubtitle と \esubtitle に

記述します。

- 著者名の記述は、2.1.1 の説明を参照してください。

執筆者が複数の場合で、メールアドレスをお持ちでない方がいる場合は、必ず `[]` を記述した上で、中を空にしてください。メールアドレスは 1 人につき 1 つだけ記述します。1 人につき複数のアドレスには対応していません。

発表者が一人で所属がない場合は、`none` と指定します。

発表者が複数で所属のない方がいる場合は、`none` 以外の適当なラベルを付けたうえで、`\affiliate` は記述しません。

メールアドレスの出力が望み通りの結果にならない場合は、`\MailAddress` に直接記述してください。

```
\MailAddress{$\dagger$name@xx.yy.zz.jp}
```

- 所属は `\affiliate` に指定します。

```
\affiliate[ラベル]
```

```
{和文勤務先\ 和文連絡先住所}
```

```
{英文勤務先\ 英文連絡先住所}
```

第 1 引き数に `\authorentry` で指定したラベルを記述します。ラベルの前後に余分なスペースを挿入しないでください。第 2 引き数に和文所属を、第 3 引き数に英文所属を指定しますが、それぞれ、勤務先と連絡先住所を `\` で区切ってください。`\authorentry` に記述したラベルの出現順に記述します。

- 和文の「あらまし」「キーワード」は、`jabstract` 環境、`jkeyword` 環境にそれぞれ記述します。また、英文の「abstract」「key words」は、`eabstract` 環境、`ekeyword` 環境にそれぞれ記述します。

- 論文末尾の著者紹介は必要ありません。

技術研究報告の体裁から論文誌の体裁に変更する場合「論文」「レター」などの論文誌の体裁に変更する場合、以下の点に注意してください。

- `\jsubtitle` と `\esubtitle` は記述しても無効になります。

- `\affiliate` の和文連絡先住所を簡略化する必要があります。論文誌を参照してください。また、勤務先と連絡先住所を `\` で区切る必要はありません。`\` があるとエラーになります。

- `jabstract` 環境は `abstract` 環境と見なしますが、`eabstract` 環境は、最終ページに一段組で出力されます。

- `jkeyword` 環境は `keyword` 環境と見なします

が、`ekeyword` 環境は、最終ページに一段組で出力されます。

2.2 見出しの字どり

`\section`、`\subsection` などについては、本誌のスタイルにより、その見出しが 4 字以下の際、5 字どりになるように設定しています(2.9, “付録” などの見出しを参照)。

2.3 ディスプレー数式

数式の頭は左端から 1 字下げのところに、また、数式番号は右端から 1 字入ったところに出力される設定になっています。この設定を前提に数式の折り返しを調整してください。`\documentclass` のオプションとして `fleqn` を指定する必要はありません。

本誌の場合、二段組みで一段の左右幅がせまいため、数式と数式番号が重なったり、数式がはみ出したりすることが頻繁に生じられると思われま。 `Overfull \hbox` のメッセージには特に気をつけてください。

数式記述の際のヒントについては、3.2 および 3.3 が参考になるかもしれません。

2.4 図表とキャプション

図表を置く位置、キャプションの記述、図の取り込み、表の記述などについて説明します。

2.4.1 図表を置く位置

`float` 環境は、それが初めて引用される段落の直後または直前あたりに挿入することが基本ですが、二段組みの場合は、それが初めて引用されるページより前に置くことが必要になることがあります。図表の出力位置は、図表の参照と同じページか、無理な場合は次のページに置くことが基本ですから、二段組みの図表の場合は、`float` 環境を記述する位置の試行錯誤が必要となる場合があります。

図表の出力位置を指定するオプションとして、`[h]` の使用は避け、`[tb]`、`[tbp]`などを指定して、ページの天か地に置くことを基本にしてください。

2.4.2 キャプションとラベル

図表のキャプションは、和文と欧文で指定する必要があります。そのため、`\ecaption` というマクロを用意しました。使い方は `\caption` と同じです。図 1 のように記述してください。

- キャプションの幅は、一段の場合には 65 mm に、二段めきの場合はテキストの幅の 3/2 に設定しています。

- キャプションを任意の場所で改行したい場合は、`\` を使って改行することができます。標準の `LATEX 2ε`

```

\begin{figure}[tb]
%\capwidth=60mm
%\ecapwidth=60mm
\vspace{45mm}
\caption{図キャプションの例}
\label{fig:1}
\caption{An example of caption.}
\end{figure}

```

図 1 図キャプションの例
Fig.1 An example of caption.

でこういう使い方をすると、エラーになるので注意してください。

- また、`\capwidth` および `\ecapwidth` に長さを指定すれば、その幅で折り返すことができます。

```
\capwidth=60mm
```

これは `\caption` コマンドの前に指定します。

- `\label` を記述する場合は、必ず `\caption` の直後に置きます。上におくと `\ref` で正しい番号を参照できません。

2.4.3 図の取り込み

図は POSTSCRIPT 形式を利用してください。そのほかのデータ形式はオフセット印刷には向きません。

適当なアプリケーション・ツールで作図し、保存形式（フォーマット）は eps 形式で、エンコーディングは ASCII (binary でなく) で保存します。

Windows 上のツールで作図する場合は、フォントをアウトライン化するのが無難です。

線の太さに注意を払い、線幅が 0.1mm 以下のものは避けます。

Macintosh 上で作図して、Windows や UNIX 上でコンパイルする場合は、eps ファイルの改行コードを DOS (CRLF) または UNIX (LF) の改行コードに変換しないと、

```
! Unable to read an entire line---
bufsize=3000.
```

Please alter the configuration file.

というエラーを生じることがあります。

ただし、このようにして作成されても、文字化け、エラー、極細の線幅、使用ツールの eps 出力の違反など様々な理由で、オフセット印刷に適さない場合があります。このような場合、印刷段階でスキャナーで読み取ることになります（「投稿のしおり」5.1 節を参照）。

取り込み方を簡単に説明します。まずパッケージとして

```
\usepackage[dvips]{graphicx}
```

などと指定し（お使いのプリンタドライバに応じて dvips を適当なものに変更してください）、

```

\begin{figure}[tb]
\begin{center}
\includegraphics{file.eps}
\end{center}
\caption{和文キャプション}
\label{fig:1}
\caption{英文キャプション}
\end{figure}

```

のように記述します。

また、

```
\includegraphics[scale=0.5]{file.eps}
```

とすれば、図を 0.5 倍にスケールします。同じことを `\scalebox` を使って、次のように指定することもできます。

```
\scalebox{0.5}
{\includegraphics{file.eps}}
```

幅 30mm にしたい場合は、

```
\includegraphics[width=30mm]
{file.eps}
```

とします。同じことを `\resizebox` を使って次のように指定することができます。

```
\resizebox{30mm}{!}
{\includegraphics{file.eps}}
```

高さとお幅の両方を指定する場合は

```
\includegraphics
[width=30mm,height=40mm]
{file.eps}
```

または

```
\resizebox{30mm}{40mm}
{\includegraphics{file.eps}}
```

です。

他にもさまざまな利用方法がありますから、詳しくは、文献 [9], [11], [13], [14], [16] ~ [18]などを参照してください。

2.4.4 表の記述

表は `\small` (7pt, 10 級) で組まれるように設定しています。

例えば、以下のように記述します。

```

\begin{table}[tb]
\caption{和文キャプション}
\label{table:1}

```

```
\ecaption{英文キャプション}
\begin{center}
\begin{tabular}{|c|c|c|}
\Hline %%
A & B & C \\
\hline
x & y & z \\
\Hline %%
\end{tabular}
\end{center}
\end{table}
```

`\caption` は `tabular` 環境の上に記述します。本誌では、表の罫の一番上と一番下を太くします。このため `\Hline` というマクロを使用してください。これは `\def\Hline{\noalign{\hrule height 0.4mm}}` と定義してあります (表 1, 2 参照)。`\hline` の太さは 0.1mm です。

表の作成に関しては、文献 [11], [14], [16], [17] など参照してください。

2.5 文献リストと文献番号の参照

BIB_TE_X を利用しない場合は、文献リストの記述——著者名とイニシャル、表題・書名、雑誌名・発行所および雑誌名の略語、巻、号、ページ、発行年などの体裁——は「投稿のしおり」に厳密に従ってください。

BIB_TE_X を使って、文献用データベースファイルから文献リストを作成する場合は、文献用スタイルとして `tieice.bst` が利用できます。標準でインストールされているようです。得られた文献リストを必要に応じて修正してください。BIB_TE_X の使い方は、文献 [14], [16], [17]などを参考にしてください。

文献引用のコマンド (`\cite`) は、`cite.sty` および `citesort.sty` に手を加えたものを使用しています。例えば、`\cite{latex,FGo1,PEn,Fujita5tex}` と記述すれば、“[16], [19], [20], [21], [1]” となるところを、“[1], [16], [19]~[21]” のように、番号順に並べ替え、かつ番号が続く場合は“~”でつなぎます。

2.6 定理, 定義などの環境

定理, 定義, 命題などの定理型環境を記述するには `\newtheorem` (文献 [14], [16] 参照) が利用できますが、下の出力例のように、本誌のスタイルにあわせて、L^AT_EX 2_ε の標準と異なり、環境の上下の空きやインデントを変更し、見出しはゴシックとならず、本文の欧文もイタリックになりません。

例えば、

```
\newtheorem{teiri}{定理}
%\thmbracket{(}{})
\begin{teiri}
これは ‘定理’ の例です。
このような出力になります。
text in Roman typeface.
\end{teiri}
```

とすれば、

[定理 1] これは“定理”の例です。このような出力になります。text in Roman typeface.

と出力されます。

また、(ステップ 1) のように、前後の括弧を変えたいときは、`\thmbracket{(}{})` のように `\thmbracket` の 2 つの引き数に前後の括弧をそれぞれ記述します。

2.7 脚注と脚注マーク

脚注マークは“^{注 1}”という形で出力されます。

2.8 verbatim 環境

`verbatim` 環境のレフトマージン, 行間, サイズを変更することができます [17]。デフォルトは

```
\verbatimleftmargin=Opt
% レフトマージンは Opt
\def\verbatimsize{\normalsize}
% 本文と同じサイズ
\verbatimbaselineskip=\baselineskip
% 本文と同じ行間
```

ですが、それぞれパラメータやサイズ指定を変更することができます。

```
\verbatimleftmargin=2zw
% --> レフトマージンを 2 字下げに
\def\verbatimsize{\small}
% --> 文字の大きさを \small に
\verbatimbaselineskip=3mm
```

% --> 行間を 3mm に

2.9 その他

2.9.1 ieicej.cls で定義しているマクロ

(1) 「証明終」を意味する記号“□”を出力するマクロとして `\QED` を定義してあります [1]。`\hfill\Box` では、この記号の直前の文字が行末に来る場合、記号が行頭に来てしまいますので、`\QED` を使ってください。“□”を出力するには、パッケージの指定として `\usepackage{latexsym}` が必要です。

(2) `\onelineskip`, `\halflineskip` という行間スペースを定義しています。その名のとおりに、1 行空

表 3 その他のマクロ
Table 3 Miscellaneous macros.

<code>\RN{2}</code>	II
<code>\RN{117}</code>	CXVII
<code>\FRAC{\pi}{2}</code>	$\pi/2$
<code>\FRAC{1}{4}</code>	$1/4$
<code>\MARU{1}</code>	①
<code>\MARU{a}</code>	Ⓐ
<code>\kintou{4zw}{記号例}</code>	記号例
<code>\ruby{砒}{ひ}\ruby{素}{そ}</code>	ひそ 砒素

け、半行空けに使ってください。和文の組版の場合は、こうした単位の空け方が好まれます。

(3) 2倍ダッシュの“—”は、`\ddash` というマクロを使ってください(3.1 参照)。—を2つ重ねると、その間に若干のスペースが入ることがあり見苦しいからです。

(4) このクラスファイルではこのほかにあらかじめ、`\RN`、`\FRAC`、`\MARU`、`\kintou`、`\ruby` というマクロ [1], [17] を定義しています(表 3)。

2.9.2 $\mathcal{A}\mathcal{M}\mathcal{S}\text{-}\mathcal{L}\mathcal{A}\mathcal{T}\mathcal{E}\mathcal{X}$ について

数式のより高度な記述のために、 $\mathcal{A}\mathcal{M}\mathcal{S}\text{-}\mathcal{L}\mathcal{A}\mathcal{T}\mathcal{E}\mathcal{X}$ のパッケージ(文献 [11], [14] 参照)を使う場合には、パッケージとして

```
\usepackage[fleqn]{amsmath}
```

が必要です。この場合、オプションとして `[fleqn]` を必ず指定してください。

`amsmath` パッケージは、多くのファイルを読み込みますが、ボールドイタリックだけを使いたい場合は、

```
\usepackage{amsbsy}
```

で済みます。

また、記号類だけを使いたい場合は、

```
\usepackage{amssymb}
```

で済みます。

なお、 $\mathcal{L}\mathcal{A}\mathcal{T}\mathcal{E}\mathcal{X} 2_{\epsilon}$ では `\mbox{\boldmath x}` に代えて、`\boldsymbol{x}` を使うことを勧めます。これならば、数式の上付き・下付きで使うと文字が小さくなります。

3. タイピングの注意事項

3.1 美しい組版のために

(1) 和文の句読点は、“,” “.” (全角記号) を使ってください。和文中では、欧文用のピリオドとカンマ、“,” “.” (“ ”) (半角) は使わないでください。

(2) 括弧類は、和文中で欧文を括弧でくる場合は全角の括弧を使用してください。欧文中ではすべて

半角ものを使用してください。

例：スタイル (Style) ファイル / some (Style) files

上の例のように括弧のベースラインが異なります。

(3) ハイフン (—), 二分ダッシュ (—), 全角ダッシュ (—), 二倍ダッシュ (`\ddash`) の区別をしてください。

ハイフンは well-known など一般的な欧単語の連結に、二分ダッシュは pp.298–301 のように範囲を示すときに、全角ダッシュは欧文用連結の em-dash (—) として、二倍ダッシュは和文用連結として使用してください。

(4) アラインメント以外の場所で、空行を広くとるため、`\` による強制改行を乱用するのはよくありません。

空行の直前に `\` を入れたり、`\` を2つ重ねれば、確かに縦方向のスペースが広がりますが、`Underfull \hbox` のメッセージがたくさん出力されて、重要なメッセージを見落としがちになります [2]。

(5) (`\word`) のように “()” 内や “()” 内の単語の前後にスペースを入れないでください。

(6) プログラムリストなど、インデントが重要なものは、力わざ (`\hspace*{??mm}`) の使用や `\` などによる強制改行) で整形するのではなく、`list` 環境や `tabbing` 環境などを使って赤字が入っても修正がしやすいように記述してください。

3.2 数式の記述

(1) 数式モードの中でのハイフン、二分ダッシュ、マイナスの区別をしてください。

例えば、

```
$A^{\mathrm{b}}\mbox{\scriptsize -}
```

```
\mathrm{c}}$
```

$A^{b-c} \Rightarrow$ ハイフン

```
$A^{\mathrm{b}}\mbox{\scriptsize --}
```

```
\mathrm{c}}$
```

$A^{b-c} \Rightarrow$ 二分ダッシュ

```
$A^{\mathrm{b-c}}$
```

$A^{b-c} \Rightarrow$ マイナス

となります。それぞれの違いを確認してください。

(2) 数式の中で、`<`, `>` を括弧のように使用することがよくみられますが、数式中ではこの記号は不等号記号として扱われ、その前後にスペースが入ります。このような形の記号を括弧として使いたいときは、`\angle (<)`, `\rangle (>)` を使うようにしてください。

(3) 複数行の数式でアラインメントをするときに数式が + または - で始まる場合、+ や - は単項演算子とみなされます (つまり「 x 」と「 $x+y$ 」の+の前後のスペースは変わります)。したがって、複数行の数式で + や - が先頭にくる場合は、それらが2項演算子であることを示す必要があります [16]。

```
\begin{eqnarray}
y &=& a + b + c + \dots + e \\
&& & \& \mbox{} + f + \dots
\end{eqnarray}
```

(4) T_EX は、段落中の数式の中 ($\$ \dots \$$) では改行をうまくやってくれないことがあるので、その場合には `\allowbreak` を使用することを勧めます [12]。

3.3 長い数式の処理

数式と数式番号が重なったり数式がはみ出したりする場合の対処策を、いくつか挙げます。

例 1 `\!` で縮める。

$$y = a + b + c + d + e + f + g + h + i + j + k(1)$$

のように数式と数式番号が重なるか、かなり接近する場合は、まず、2項演算記号や関係記号の前後を、`\!` ではさんで縮める方法があります。

```
\begin{equation}
y\! = \! a\! + \! b\! + \! c\! + \! \dots \! + \! k
\end{equation}
```

$$y = a + b + c + d + e + f + g + h + i + j + k \quad (2)$$

例 2 `eqnarray` 環境を使う。

上のようにして縮めても、なお重なったりはみ出してしまう場合は、`eqnarray` 環境を使って

```
\begin{eqnarray}
y &=& a+b+c+d+e+f+g+h\! \nonumber \\
&& & \& \mbox{} + i + j + k
\end{eqnarray}
```

と記述すれば、

$$y = a + b + c + d + e + f + g + h + i + j + k \quad (3)$$

となります。

例 3 `\mathindent` を変更する。

数式を途中で切りたくない場合は

```
\mathindent=0zw % <-- <1>
\begin{equation}
y=a+b+c+d+e+f+g+h+i+j+k+l+m
\end{equation}
\mathindent=1zw % <-- <2> デフォルト
と記述すれば (<1>) ,
```

$$y = a + b + c + d + e + f + g + h + i + j + k \quad (4)$$

となって、数式の頭が左端にきます。この場合、その数式のあとで `\mathindent` を元に戻すことを忘れないでください (<2>)。

例 4 `\lefteqn` を使う。

$$\iint_S \left(\frac{\partial V}{\partial x} - \frac{\partial U}{\partial y} \right) dx dy = \oint_C \left(U \frac{dx}{ds} + V \frac{dy}{ds} \right) ds$$

上のように、= まだが長くて、数式がはみ出したり、数式と数式番号がくつつく場合には、`\lefteqn` を使って

```
\begin{eqnarray}
\lefteqn{
\int\!\!\!\int_S
\left(\frac{\partial V}{\partial x} - \frac{\partial U}{\partial y}\right)
dx dy
}\quad \nonumber \\
&=& \oint_C \left( U \frac{dx}{ds} + V \frac{dy}{ds} \right) ds
\end{eqnarray}
```

と記述すれば、

$$\iint_S \left(\frac{\partial V}{\partial x} - \frac{\partial U}{\partial y} \right) dx dy = \oint_C \left(U \frac{dx}{ds} + V \frac{dy}{ds} \right) ds \quad (6)$$

のような形にできます。

例 5 `\arraycolsep` を変える。

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \dots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \dots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{m1} & a_{m2} & \dots & a_{mn} \end{pmatrix} \quad (7)$$

上の行列は `array` 環境を使って記述しましたが、`array` 環境を使っていて数式がはみ出す場合は、数式全体のフォントサイズを変える前に、

```

\begin{equation}
\arraycolsep=3pt % <-- <1>
A = \left(
\begin{array}
{@{\hspace{2pt}}cccc@{\hspace{2pt}}}% <-- <2>
a_{11} & a_{12} & \ldots & a_{1n} \\
a_{21} & a_{22} & \ldots & a_{2n} \\
\vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\
a_{m1} & a_{m2} & \ldots & a_{mn}
\end{array}
\right)
\end{equation}

```

<1> のように、`\arraycolsep` の値 (デフォルトは 5 pt) を小さくしてみるか、<2> のように `@` 表現を使うことができます。

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \dots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \dots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{m1} & a_{m2} & \dots & a_{mn} \end{pmatrix} \quad (8)$$

式 (7) と式 (8) を比べてください。

例 6 `\quad` の定義を変える。

行列を記述する場合に使用する `\matrix`、`\pmatrix` はコラムの間に `\quad` が挿入されているので、間隔を縮めるには、ディスプレイ数式環境の中で、`\def\quad` の定義を変えてみてください。例えば

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \dots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \dots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{m1} & a_{m2} & \dots & a_{mn} \end{pmatrix} \quad (9)$$

のような `\pmatrix` で記述した行列式で、`\quad` の定義を変更すると

```

\begin{equation}
\def\quad{\hspace{.5em}\relax}
% デフォルトは \hspace{1em}
A = \pmatrix{
a_{11} & a_{12} & \ldots & a_{1n} \cr
a_{21} & a_{22} & \ldots & a_{2n} \cr
\vdots & \vdots & \ddots & \vdots \cr
a_{m1} & a_{m2} & \ldots & a_{mn} \cr
}
\end{equation}

```

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \dots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \dots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{m1} & a_{m2} & \dots & a_{mn} \end{pmatrix} \quad (10)$$

となります。

`amsmath` パッケージを利用する場合、`\matrix`、`\pmatrix` はそれぞれ、`\begin`、`\end` 型の `matrix`、`pmatrix` 環境に変わるので注意してください。この場合は、例 5 が参考になります。

以上挙げたような処理でもなお数式がはみ出す場合は、あまり勧められませんが、以下のような方法があります。

- `small`、`footnotesize` で数式全体を囲む。
- 分数が横に長い場合は、分子・分母を `array` 環境で 2 階建てにする。
- `\scalebox` を使って、数式の一部もしくは全体をスケーリングする。
- 二段抜きの `table*` もしくは `figure*` 環境に入れる。この場合、数式番号に注意する必要があります。

4. 最終原稿提出方法

- 最終原稿の提出に関しては、各ソサイエティの「投稿のしおり」を参照してください。
- ソース・ファイルはできるだけ 1 本のファイルにまとめてください。
- 著者独自のマクロを記述したファイルや文献、図の `eps` ファイルなどを忘れていないかご確認願います。

文 献

- [1] D.E. クヌース, 改訂新版 `TEX` ブック, アスキー出版局, 東京, 1992.
- [2] 磯崎秀樹, `LATEX` 自由自在, サイエンス社, 東京, 1992.
- [3] S. von Bechtolsheim, `TEX` in Practice, Springer-Verlag, New York, 1993.
- [4] 藤田眞作, 化学者・生化学者のための `LATEX`—パソコンによる論文作成の手引, 東京化学同人, 東京, 1993.
- [5] 阿瀬はる美, てくてく `TEX`, アスキー出版局, 東京, 1994.
- [6] N. Walsh, Making `TEX` Work, O'Reilly & Associates, Sebastopol, 1994.
- [7] D. Salomon, The Advanced `TEX` book, Springer-Verlag, New York, 1995.
- [8] 藤田眞作, `LATEX` マクロの八衢, アジソン・ウェスレイ・パブリッシャーズ・ジャパン, 東京, 1995.
- [9] 中野賢, 日本語 `LATEX 2ε` ブック, アスキー出版局, 東京, 1996.
- [10] 藤田眞作, `LATEX 2ε` 階梯, アジソン・ウェスレイ・パブ

- リッシャーズ・ジャパン, 東京, 1996.
- [11] 乙部巖己, 江口庄英, p_LA_TE_X 2_ε for Windows Another Manual, ソフトバンク パブリッシング, 東京, 1996–1997.
- [12] ボール W. エイブラハム, 明快 T_EX, アジソン・ウェスレイ・パブリッシャーズ・ジャパン, 東京, 1997.
- [13] 江口庄英, Ghostscript Another Manual, ソフトバンク パブリッシング, 東京, 1997.
- [14] マイケル・グーセンス, フランク・ミッテルバッハ, アレキサンダー・サマリソ, L^AT_EX コンパニオン, アスキー出版局, 東京, 1998.
- [15] ビクター・エイコー, T_EX by Topic—T_EX をよく深く知るための 39 章, アスキー出版局, 東京, 1999.
- [16] レスリー・ランポート, 文書処理システム L^AT_EX 2_ε, ピアソンエデュケーション, 東京, 1999.
- [17] 奥村晴彦 [改訂版] L^AT_EX 2_ε 美文書作成入門, 技術評論社, 東京, 2000.
- [18] マイケル・グーセンス, セバスチャン・ラッツ, フランク・ミッテルバッハ, L^AT_EX グラフィックスコンパニオン, アスキー出版局, 東京, 2000.
- [19] マイケル・グーセンス, セバスチャン・ラッツ, L^AT_EX Web コンパニオン—T_EX と HTML/XML の統合, アスキー出版局, 東京, 2001.
- [20] ページ・エンタープライゼス(株), L^AT_EX 2_ε マクロ & クラスプログラミング基礎解説, 技術評論社, 東京, 2002.
- [21] 藤田眞作, L^AT_EX 2_ε コマンドブック, ソフトバンク パブリッシング, 東京, 2003.
- [22] 吉永徹美, L^AT_EX 2_ε マクロ & クラスプログラミング実践解説, 技術評論社, 東京, 2003.

付 録

1. PDF 化する際の注意

amsmath パッケージを利用した場合, dvi ファイルをプレビューアで正常に表示できるものが, pdf に変換したときに一部の数式記号を表示できなくなることがあります.

本誌の数式は 9pt のフォントを使用していますが, Blue Sky Research のフォントに cmex9.pfb が抜けているのが原因と見られます. この場合, 以下のパッケージを追加します.

```
\usepackage[fleqn]{amsmath}
\usepackage[psamsfonts]{amssymb}% <-- 追加
amssymb パッケージにオプション psamsfonts を指定することにより, cmex10 をスケールして使うようになります.
```

参考までに, pdf の書きだしには以下のような方法があります.

(1) ドキュメントクラスのオプションに mentuke を加える

```
\documentclass[mentuke]{ieicej}
```

(2) dvi ファイルを dvips などのツールで ps に書き出す.

```
dvips -t b5 -0 -lin,-lin
-o file.ps file.dvi
```

(紙面の幅の都合で改行していますが, 改行の必要はありません.)

その後, ps ファイルを Acrobat Distiller を使って pdf に変換する.

```
(3) dvips で dvi ファイルを pdf に変換する.
dvips -p b5 -x 0in -y 0in
-o file.pdf file.dvi
```

(紙面の幅の都合で改行していますが, 改行の必要はありません.)

2. jis.tfm の利用

jis.tfm (東京書籍印刷の小林さんが作成された和文フォントメトリック)を利用したい場合は, ドキュメントクラスのオプションに usejistfm を指定します.

```
\documentclass[paper,usejistfm]{ieicej}
```

jis.tfm のインストールなどに関しては「日本語 T_EX 情報」(<http://www.matsusaka-u.ac.jp/~okumura/texfaq/>)などを参照してください.

3. 削除したコマンド

本誌の体裁に必要なないコマンドは削除しています. 削除したコマンドは, \part, \theindex, \tableofcontents, \titlepage, ページスタイルを変更するオプション (headings, myheadings) などです.

4. バージョン 1.0 からの変更点

- 「技術研究報告」の体裁に対応.
- 複数の所属がある場合に, ラベルの記述順に所属マークが出るように変更.

- C 分冊の場合に, メールアドレスを脚注部分に出力できるようにした.

5. バージョン 1.1 からの変更点

- 「技術研究報告」の先頭ページの出力様式を変更.

6. バージョン 1.2 からの変更点

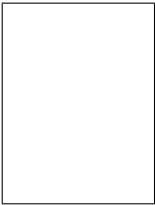
- B-I, B-II および C-I, C-II がそれぞれ, B, C に統合されたことに伴う修正.

- C 分冊で「レター論文」が「レター」と変更されたことに伴う修正.

- すべての分冊でメールアドレスを脚注部分に出力できるように修正.

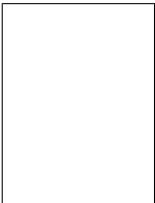
- 英文アブストラクトと英文キーワードを記述できるように定義を追加.

- 複数の「現在の所属ラベル」を指定できるように修正。
- 会員種別の「Associate Member」(准員)を「Affiliate Member」に、「Honorary Member」(名誉員)を「Fellow, Honorary Member」に変更。および、「正員：フェロー (Fellow)」を追加。
- \typeofletter を指定しない場合、「研究速報」の体裁になるように変更。
- 著者紹介で顔写真の eps を取り込めるようにした。顔写真のない場合にも対応。
- jis.tfm が使用できるようにした。
(平成 xx 年 xx 月 xx 日受付)



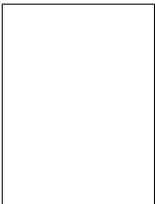
電子 花子 (正員)

1996 東北一大学情報工学科卒。1999 東京第一大学工学部工学部助手。某システムの研究に従事。



情報 太郎 (正員)

1995 大阪一大学工学科卒。1997 同大学院工学研究科修士課程了。1998 大阪(株)入社。某コンピュータ応用の研究に従事。ABC 学会会員。



通信 次郎

1980 九州一大学理工学部卒。1981 大阪(株)入社。現在 ATT 日本研究所に所属。

Abstract IEICE (The Institute of Electronics, Information and Communication Engineers) provides a pL^AT_EX 2_ε class file, named `ieicej.cls` (ver. 1.3), for the IEICE Transactions. This document describes how to use the class file, and also makes some remarks about typesetting a manuscript by using the pL^AT_EX 2_ε. The design is based on ASCII Japanese pL^AT_EX 2_ε.

Key words pL^AT_EX 2_ε class file, typesetting, math formulas